

次期役員選挙*****

立候補受付中： 6月8日(金)まで、

委員長(岩井)、副委員長(小松崎)、書記長(花島)は、立候補することを決めました。原子力や、仕事の先行きに懸念があるうえ、賃金削減問題などもある大変な時期です。

活力ある執行体制を作るため、協力をお願いします。

=====

研究問題討論会：原子力のこれからをどうするか(4月11日)： その1、報告の3

< 単純すぎる >

書記長： 先のこと、どういふ原子力だったらやれるかと考えると、複雑なものはだめだと思ふ。何かのトラブルに対していろいろな可能性があつて、シナリオを考えきれない。その点原子力をやっている人、能天気な人が多いと思ふ。すごく単細胞。

Aさん： 私は、原子力工学科の授業で、「PWRというの、安全・安定なシステムだ」と美浜原発の細管破断事故の後で言われた経験があります。あきれました。

書記長： ある意味では、炉心でボイドが出ないことになっているから、核的な安定はよい、考えやすいというのはわかりますが。

Aさん： BWRに比べればそうかも知れませんが、それから熱を取るのに蒸気発生器が使えるからとかいろいろ、ありましたけど。あまりに衝撃でした。

書記長： ひとつの側面を見て突っ走る傾向がありますね。ただ、僕は、技術者として見たとき、何か新しいことがあつたら、「まずはやってみよう」という感覚で、はじめるといふのはあつて、原子力もそんな風にはじめたのではないかと思ふ。問題は、その後ずっとそれで行って今の状態といふのはまずい。最初から安全なものはない。原子力じゃなければよかった。昔聞いた話だけど、火力発電、ステップを上げるたびに事故があつたと聞いています。

Eさん： スケールアップしすぎ。

< 事故に対する備えがなかったが… >

Kさん： 原発は、放射能が出ちゃったときにどう人間を避難させる。という点で破綻した。マニュアルがあつても、その通り動けなかつたし、現実に起きたことに対応できるマニュアルでもなかつた。

委員長(岩井)： ヨーロッパでは、考え方がちがつて、起きると思つていなくても、起きたときの事を考えることを切り離してやっている。「融けた燃料が水の中に落ちたらどうか」とかやっている。日本では(研究したいといつても)、「そんな事故にならないと国が言っている」と言われる。

書記長： 原子力をやる立場で、中から見て考えて、「起きないとあんたは言つても、そんなの確かじゃないよ」と言つて、あるいは「見落としがあるかも知れないでしょう」と言つてやるのではないですか？ 本当に起きないことに確信があれば、やる必要はない。

Cさん： 欠陥の指摘を評価するといふことが欲しいですね。「よく弱点を見つけてくれた」といふように。ところが、「なんといふことを言う」といわれるのが日本。

副委員長(小松崎)： 旧動燃は、そういう指摘をする人をいじめた。

書記長： 弱点の指摘を評価する姿勢が欲しいのはまさにそうなのだが、普通に考えたつて起こりうることを無視していたように思ふ。私は、全電源喪失なんか、地震や津波がなくても起こりうると思つている。それを何で「起こりえない」とか思つていたのかが原子力のわからないところ。

Bさん： 事故時の避難の話に戻つていいですか。あれは、一人の人がしっかりやろうとしたのだけど、保安院の院長から、「寝た子を起こすようなことするな」と言われたと国会答弁で言つています。拒否したのだけど、予算を付けてもらえなかつたとも言つています。

書記長： それは、技術的に見識がなかつたといふことでしょうか。なのに高い地位にいて批判も受けずに済んでいるの？

委員長： システムといふ意味では、ある方向に向いたことしか出来ない。

Kさん： 根が深いところがあります。僕なんかでも、危ないと思つても言わなかつたりします。2面性があるのか。だから、だれそれを突き上げようといふ話しになかなかならない。

書記長： 私はやろうと思つている。だけど、一人の問題ではなく、私は、原子力界に対して全面否定に近いものを持っているから、そこを攻めたい。僕は、柏崎刈羽原発が、想定外の地震で被害を受けたとき、危惧を持つようになった。地質学者でもないし、原子力屋でもないが、科学的感覚からいつてどうなつているのかと思つた。安全研究をやつていた知人に話を聞いたら、基本的に原子力側から独自の研究をしているのではなく、地質学者の意見だの論文だのを使つているだけだとの話だつた。「とんでもない地震といふ危惧は確かにあるのだ」と言つていた。その時、僕が「絶対今回のようなことが起きる」と思つたかといへば、そうではない、危惧を持つただけ。非常に深い危惧を。そういうとき、どういふ行動を起こすかだが、「間違いなく起きる」と思へばもっと騒いでいた。確率の問題だから難しい。今となつては、何十年とかのオーダーで言えば同じようなことはほぼ間違いなくおきると思つていますが、おっしゃる通り、確率的なことは難しいです。いろいろなあつれきもあるし。

委員長： 政府よりは、地方自治体から、運転再開に慎重な意見も聞く。この事故が起きて、自分の県民が被害をこうむることを考えるようになった。東京の人は考えないのかも知れないが、「原発から遠い人は『動かせ』といふな」とは言えますね。

書記長： 「心配だから、やめてね」とは言ってもね。事故があれば、日本国で対応しなければならぬので、巻き添えを食いますから。

委員長： 今度、東京で、フランスの労働組合、CGTというナショナルセンターの役員が来て、懇談とシンポジウムを行う予定があります。ヨーロッパでは、過酷事故対策を研究しているけれど、どういう風に考えてやっているのか聞きたいところ。スリーマイル事故の後、ベントフィルターも義務化したように。

書記長： ただ合理的に考えて、リスクがあると考えているのではないですか。

Aさん： 日本のメンタリティー、考え方が未熟なのだと思う。実際に真剣に向き合う精神的な強さがない。

書記長： それは同意します。だから、何かをやるにしても率直にやれない。絶対安全みたいなことを言わざるを得ないと思っているし、危惧があっても、「絶対安全」みたいなことを言ってやる。何度も言っているうちに、自分もだましてしまう。

Aさん： 向こうの人に、「なぜやるのですか」と聞いても、「なぜやらないのですか」と逆に聞かれるのではないですか。現に福島でこれだけのことが起きて、なおこうだというのが理解できない。

書記長： 僕が思うのは工学的なセンスがないということ。スリーマイル事故が起きたときに、「運転員の未熟」とか言われたけれど、ものを作るというのは、いろいろ、そういうものがあって当たり前、フィルセーフだのフルプルーフだの言っているはずなのに、頭にない。ものすごく単純なシナリオしか考えない。たとえば、あるところの会話で、安全性研究をやった人が、何百億円使ったと、自慢していた。軽水炉が安全だということを示したということです。僕が、スリーマイル事故が起きたことを指摘したら、「配管の大口径破断が大丈夫だったら、中口径、小口径は大丈夫だ」と思っていたと言う。ものをやっている、何かから派生的にまずい連鎖が起きることを、恐れ、警戒すべきものと思っている僕の感覚とはえらく違う。

「バンと水が漏れたら、ECCSで水をドバーと入れて、冷えたら万歳」もいけれど、チョロチョロ漏れて、人間の誤判断があったりして、とんでもないシナリオが進行するかもしれないことを恐れるセンスを持っていない。工学として、それでよいと思っている。「臨界事故は、爆発して終わる」と思っていたり、「福島だって、地震には耐えた。津波は見落とした」なんて間抜けなことを大きな声で言っている人がいる。そんなのは、考えられることのひとつであって、何も立証されていない。

＜ ストレステストは十分ではない ＞

岩井： 当面の運転再開問題に戻ると、今の地震に対する安全確認は、主要構造物を計算機上で揺さぶってみているだけだと思う。私は、例えば制御系など電子回路が揺さぶられても機能を維持しているか、危惧している。今のストレステストでは、そういう危惧には応えられない。

書記長： そういうことに耐えるものは作れるが、はじめからそういう想定で作られていない限り、ある限度を超えたら、たとえ実物テストでOKでも、原子力で使うには

リスクーだと思う。それは、原子炉の想定寿命の問題でもいえる。設計、製作で30年を想定していたものを、後から「40年持つだろうか」と検証しようとしても、設計時の細かい計算書、検討書類など、すべては残らないから、後からの検証ではフォローできる保証がない。「原子力」であることを考えれば危険すぎる。それと、ストレステストにも言えるが、動かすためにやっているというところに問題がある。あまりに明らかな問題が出てくれば別だが、中途半端な結果が出たときに、何千億円の装置を「使わない」とする決断は、難しい。改修に大きな金が必要な場合も同じ。そんな時、正直でいられるのか。あいまいな危惧では、危惧としても言えなくなる。プレッシャーがかかる。

＜ 根本からの見直しが必要 ＞

Bさん： 強固な基盤の上で作ることにして、基準地震動を入れて、OKを出すという考え方が、今回の地震でだめになったと思っています。女川原発で地盤が1メートル下がったけれど、今の基準は、そういう考えはなかったはず。

書記長： そういう意味で、先のことを考えると、今まで考えなくてよかったことを[どこまで考えなければならぬか]の研究をしなければならぬということがいえる。

岩井： 電源設備が壊れている。受電設備が地震で壊れている。そういうことも視野に入れなければならない。そういう意味で作っちゃっているものはほとんど無理。

書記長： 言っているのはそういうことですね。17mの津波でやられたから、18mや19mの津波を考えればよいということではない。上限を予測する手法が間違っていたのだから、そこから見直さなければならない。ただの装置ではなく、原子力だから。

副委員長： 4号機のプールも危なかったと聞いています。

委員長： カナルとの間のゲートが開いてしまって、そのおかげで、流れた水が保管燃料の冷却に役立った。逆に、どこかに漏れたら、大変だった。

書記長： 電気がなくなるだけで、大変なシステム。地震の後、自宅で、手回し発電機つきのラジオで、「原発で全電源喪失」と聞いて青ざめました。

さて、時間もだいぶ過ぎました。これで終わりではなく、次もありますから今日は終わらしましょう。

委員長： 今日の議論で出た、運転再開問題については、組合として、言うべきことを言うことにしましょう。また、住民の汚染検査などについて、わからない点を聞いてみることにします。 **終わり**

***** 6月期一時金について*****

6月期一時金については、先の団体交渉で、昨年並み：1.9か月の回答がありました。労組の要求は、増額ですので、その点は不満ですが、給与削減問題などで厳しい状況の中での回答としては、評価します。しかし、7級についての明確な回答を聞いていません。次の交渉で聞かなければなりません。

.....